

〈座談会〉

現在、そしてこれからのリベラル・アーツの可能性を問う (1)

江 村 和 彦
小 坂 啓 史
原 田 忠 直
片 山 善 博

片山：今日の、そしてこれからのリベラル・アーツの可能性について話し合っていきたいと思います。最初に、この座談会の目的や意義について触れておいた方がいいかと思います。リベラル・アーツとは、大学教育においても長い歴史があります。ヨーロッパでは、中世の大学において、神学や、法学、医学などの専門科目の他に、自由7科目として、論理学や弁論術、幾何学、天文学、音楽などが組み入れられています。専門的な教育を受けるための基礎という意味もあるのですが、同時に、専門の枠を離れた自由な学びという意味もあります。戦後の大学教育では、しばらく、教養課程と専門課程が分かれていて、今の時点からするといろいろと、問題はあったと思いますが、リベラル・アーツとしての教養が教えられていたわけです。その後、国の方針もあり、多くの大学で教養部が廃止され、教養科目も削減されていきました。教養科目においても、再編が行われ、1990年代には、例えば、第二外国語が削られ、残った英語科目においても、実用的な？スキル重視の内容に変更されました。

本学においても、1980年代には、社会福祉学部でも、芸術や語学、哲学、文学など多くの教養の教員が在籍していました。現在は、リベラル・アーツも風前の灯火といった感があります。ところで、本学では、2000年代に入って、教養を復活させるという流れもあったようです。全国的にも、1990年代の教養部解体に対する、反動の動きがあったようです。産業界でも、やはり教養は大事だということだったのでしょう。そこで、本学でも教養の意義について話し合われたようです。例えば、これは、当時在籍していた池谷壽夫先生によると、教養科目は1, 2年次だけでなく、むしろ3, 4年次に学ぶ必要があるということで、社会福祉学部や子ども発達学部(現「教育・心理学部」)に「現代基礎教養」という科目が作られたということです。また、池谷先生(哲学)、江坂哲也先生(ドイツ文学)、牧洋子先生(ソーシャルワーク論)の3名で教養についての鼎談も行われています。(『日本福祉大学研究紀要・現代と文化』第118号、2008年) この鼎談はかなり長いもので、70ページくらいあります。3名とも、いわゆる団塊の世代で、戦後の教養教育を受けてきた人たちですが、主体的な学びをする上で、いかに教養教育が重要かということ力を説かれています。当時の教養教育の一つに、古典を読むということがあり、古典

(例えば、ゲーテやシラー)との対話を通して、自分で考える力を養うといったことが目的としてあったようです。また、3名とも文系ですが、数学や物理学など理系の科目を学ぶことの重要性も語られていて、視野を広げる上でも大きな役割を果たしたということです。この鼎談からすでに10年以上が経っていますが、戦後の教養教育の意義を考える上でも、重要な文献であると思います。と同時に、これからの教養教育をどのように考えていくべきかについては、もう一度再考してもよい時期に差し掛かっているのではないかと思います。古典を読むことも重要ですが、同時に、新たな視点で教養教育（私たちはここではリベラル・アーツという言葉を使いたいたいが）を提示できないかと思ったわけです。

今回は、教育・心理学部の江村先生、小坂先生、経済学部の原田先生、社会福祉学部の片山と4名で、新たなリベラル・アーツの可能性を考えていきたいと思います。これまでも『日本福祉大学研究紀要・現代と文化』では、原田先生や小坂先生たちと、映画論について鼎談を行いました。また原田先生は、漫画論についての座談会も本紀要に掲載しています。映画や漫画などのアートについて論じること、リベラル・アーツの重要な要素だと思っています。

さて、アートという言葉からは、〈創造すること〉が連想できます。自由な技術を用いた創造です。まずは、造形作家として、何度も個展を開かれている江村先生に口火を切っていただきたいと思います。

江村：ご指名がありましたので、私から話させていただきます。リベラル・アーツっていうと、難しいことを語らなきゃいけないのかなって思うのですが、まずは、自分の経験のなかから話してみます。リベラル・アーツが、大学の教科というか、授業の中で、どう位置づけられようかと思ったときに、やっぱり今の学生たちが興味を持って、あとは実際やってみたら、これなら取り組めそうだっていうようなものとして落とし込んでいくことが大事だと考えています。何か、学生が見たり聞いたりという受身よりも、何かしら実践して、「それってどういうことなの」と、自然と不思議に思ったり疑問に思ったりっていうところから初めて、「実はこれはねって、こういう物だよ」というようなことから始めると、割と敷居が低くやれるのかなって思っています。実は、前任校でも今の本学に来て思うのは、とくに制作の面で言えば、この道具はこう使うっていう、僕の中ではあまりにも当たり前で普通に思っていることが、学生にとっては初めてのことで、全くその道具が使えないことがある。道具が使えないと、作りたいものは当然作れないし、その道具だとか材料に対する知識があれば、自分が表現したいものが表現できるんだってことがあります。たぶん、高校までのなかで経験がなさすぎて、そこを一回解きほぐして、やり直すのが、造形の授業だったりするんですね。で、理屈ではわかっているけど、描いてっていても描けない。信じられないかもしれないけど、クレパスとか、クレヨンでは描けませんっていう学生がいます。みると紙が捲ってないから描けないだけなんですよ。捲れば芯が出てくるでしょうということすら、誰かにやってもらったということでしょう。もっと衝撃的なことがありました。ある国立大学の教職課程で非常勤していたとき、カッターナイフで鉛筆を削ってごらんって

言ったら、「先生削れません」と手をあげる女の子がいたから、どれどれみせてって言ったら、カッターナイフの刃ではない部分で、一生懸命削ってたんです。カッターナイフの刃がどこにあるかもわからないわけです。将来、小学校の先生になるために学んでいる学生なんですけどね、これまで削ったことがなかったんでしょうね。本来は、何かしらそういった経験を積んで、なんでこうなるのかっていうところがないと、学ぶことにつながらないのではないかと、思っています。そうした基礎があって、刃物って元々どう使う、紙や金属ができる前はねとか、と話が膨らんでいくわけです。今は、つくる際に道具など全部揃ってるのが大前提だし、さらに言えば、スマホのように親指と人差し指だけで、授業が成り立ってるような世の中なのかなと思います。

原田：親指と人差し指だけですか。指先だけの感触で感じ取るとは、少々、もったいないというか、寂しいですね。

江村：身体とか手をしっかり使うって、実はすごく大事なんじゃないかなって思っています。それこそ人間の歴史でしょう。道具の歴史から人間の歴史を理解するということでもあります。たとえば、何気なく使ってる茶碗も、実は日本と海外とでは全然違うんだよってということがわかってくる。茶碗をつくるのも、この大きさが適正だと思う大きさをどれぐらいかということのを改めて考えたり、使ってみないとわかんないってところがたくさんある。言葉で伝えても「ふーん」で終わって、分かったような気になるだけで、そのまま通り過ぎてしまう。じゃあ自分で茶碗をつくってみたときに、焼いたら縮まるんだということがわかる。実際、つくったものを持ってみたら重い。なぜかってそれは器を肉厚につくったからだからだよってということがわかる。そもそも器を持つっていうのは、日本の文化として茶碗を持つ文化があって、西洋は持たないよねっていうのもいわれてみないと気づかなかったりする。そういった経験だとか、行為を通じて、そこから「なんだろう」というふうにしていくのが今の学生にとっては入りやすいものじゃないかなって、造形というか、私の立場から思っていることなんです。

原田：とても面白い指摘ですね。

片山：本当、面白いですね。見ることと制作すること。見ることも重要だけど、実際に触れて、そしてつくってみなければわからないことも多い。見ることでいうと、鑑賞というのかな、この前ドイツのミュンヘンの美術館に行ってきたんです。そこは古典的な名画を多数所蔵しているアルテ・ピナコテークという名前の美術館ですが、館内では絵を見ながら、模写している人が多いんですね。専門的に書いている人もいれば、素描っていうのかスケッチしている人もいますね。実際に自分でスケッチしてみないとわからない。スケッチしてみることで、単に見るだけでは見えないもの、対比の仕方や微妙な調和や揺らぎなど、わかることが多い。多分、下手でいいんです。ただ描いてみることによって、全体のバランスや奥行き感だったり、作者が描きた

かったものが、わかる気がするのです。この実感するってことがすごく大切ではないかと思うんです。

原田：模写ですね。海外の美術館でよく見かける風景ですね。

江村：そうですね。今の「つくることの意味」であるとかね。焼き物でも、実際に焼いてみることによって初めてわかるってことが、あるわけですね。焼き物を単に見ていて、変化していくことを確認するのではなくて、実際に、自分でやることによって初めてわかる。そこが、やっぱりすごく面白いところというのかな。まさに、今、片山先生がおっしゃったみたいに、見てるようで見てないっていうことがあるということでしょう。先日、小坂先生も授業に参加していただいたんですけど、学部の1年生を対象とした授業で、「ソーシャルビュー」っていうのをやってみました。目の見えない人と一緒に美術館に行くと仮定して、一枚の絵を用意します。目が見える人が、それはどんな絵ですというのを、こんな感じに見えるという感想を言って、目の見えない人が、「どんな絵なんだろう」って確認する作業を行います。そうすると面白いことが起こって、同じように見てるはずなのに、Aさんは、絵の中のリングに注目する。でも、Bさんは女の人がすごく綺麗であることに注目する。つまり、見るところが全然違って、リングなんか書いてあったかっていうふうに、同じ絵を見てるはずなのに、見るところが違うから、全然違う絵の感想のように聞こえてくる。このずれが面白い。見えない人は最後まで見えないんですけど、見えない人なりに、その見えてる人の感想を聞いて、その価値観のずれを楽しんでしまうんです。

原田：面白い授業ですね。正確に伝えることではなく、ズレの存在を知ることが大切なんだろうね。

江村：お互いに見えてるはずの人が本当に見えてるのっていうところを確認するっていう、そういうことをちょっとやってみてるわけです。そういえば、この授業の内容は、同名タイトルの本を参考にしているのですが、映画にもなっています。「目の見えない白鳥さんとアートを見に行く」というものです。確か、岐阜で上映していたはずですが。しかも、この白鳥さんっていう方は、本学の卒業生です。授業に白鳥さんを招いて、さらに面白い授業ができそうです。

原田：白鳥さんが、その映画を撮ったのですか？

小坂：いや、出演しているということですよ。ドキュメンタリーなんですけれどもね。この本を書いた原作者が監督の1人になって、撮影しているという。もう1人共同監督がいるんです。ドキュメンタリー監督ですけれども。

江村：ちょうど私がその本読んで、授業をやってみて、その直後ぐらいに映画化されています。それを小坂先生が岐阜で見てきたと。

小坂：舞台挨拶があったので、話を聞きたいなと（笑）。

原田：岐阜のミニシアターにはよく行きますけど、その映画は知りませんでした。相変わらず、小坂先生の映画好きには頭が下がります。とはいえ、江村先生の授業の話に戻すと、学生の反応はどうですか？

江村：やっぱり学生はすごく新鮮で面白いという感想が多いです。同じ絵を見ているのに、学生のコメントが全然違う。授業では、美術館に行ったつもりで、1人に目隠しをしてもらって、カラーコピーした絵葉書サイズの絵をランダムに20枚ぐらい並べて、グループ毎に絵を選択して、絵の感想をそれぞれ順に何人か言っていて、目の見えない人は一体どんな絵が書いてあるんだろうって想像しながら最終的にどれって当てるっていう授業です。

原田：みんなバラバラの感想を言い合っている中で、正解するものですか？

江村：大体当たるんです。ただ、当てることよりも、むしろそれぞれの感想が、なんか全然違うことに「なんで」と言い合っていますね。とくに、抽象画をやると面白いです。あんまり同じ傾向の絵ばかりだとつまらないから、本当にいろんな絵葉書をカラーコピーして、彫刻もあったり、現代美術まで広げています。広げれば広げるほど面白いです。美術ってこうやってみなきゃいけないというルールは、本当はないんですけど、やっぱりセンスがないからとか、って言って簡単に逃げちゃう。ですから、「ソーシャルビュー」のような遊びみたいなことをした方が、意外と面白そうって思ってくれるかなと思っています。ある種の入り口ってわけじゃないけど、そういう入門とか入り口として位置付けています。やっぱり、片山先生の話じゃないけど、古典をみんなでやろうって言っても、なかなか難しいですよ。だからどっかに入口っていうものを準備しておかないと、それはやっぱり無理なんでしょうね。

原田：リベラル・アーツを学ぶ上での入口の必要性ということですね。

小坂：そういう意味で言うと、本当にその体験的なものをする、体で何かをやるっていうことがとても重要になってくるということは、わかる気がしますね。今のお話を聞いていると、感覚とか視覚とか嗅覚とか、そういう五感から入るという、そこをもう一回取り戻すといったところから、それも若者にとってはとても身近というか、とっつきやすいものではあると思うんです。で、一方で現代を基盤にして考えると、やっぱりスマホとかそういうものを使ってというの

も、当たり前になっていますよね。

原田：それは外すことはできないですね。

小坂：そちらのチャンネルから入っていくっていうようなこと、同じ意味だと思うんですけども、江村先生が今おっしゃったことも、そちらから、つまり日頃親しんでるものよりもっと根源的なものとしてそういう触覚などがあると思うんですが、今の若者たちが、スマホを使って動画を撮っているというようなものも、…やはりそれは若者にとっては現実の地続きといいますか、普段から使っている日常的な道具、触覚の一部みたいになってるようなものだと思うんですね、視覚だとか、聴覚だとかも。だからそれを、江村先生がおっしゃっていたことの延長線上に、そういうものがあるというように位置づけることができるのであれば、そこから例えば、私だったら映像作品をつくっていくというようなことに繋がる、ということは一つ考えられると思うんですね。もう一つ、もう一回江村先生のそういう立場に立ち戻って考えると、やはり映像をつくる、とくに映画作品を作る場合には、ロケハンなどが必要なわけです。光がどのぐらいあたってあるか、といった照明の問題もあるし、あと音ですね。実は映画は音がすごく重要なので、聴覚の方もきっちりと自分で確かめながらやっていかないといけない、ということがあります。映像づくりって、昔はすごくハードルが高かったんですけども、今は誰でもスマホを持っているということで、取り組みやすい状況にあります。その意味では、手に触れて重さを感じたりっていうことと、その延長線上にあるレベルのものとして、そういったものを使っていくということも…もちろん造形芸術というものと、延長線上という意味ではまたちょっと違うところはあるのですが、しかしそういったように敷居が低くなったという、元々なかなか手をつけにくいものだったというものからアクセスしやすい、そういう分野になってきたのかなというようにも思います。リベラル・アーツということかというと、先ほど池谷先生の教養とは何かといった、教養を復活させるというような、そういう話し合いがあったということですが、そういう要素が全く変わったっていうわけではなく、そこから引き継がれているものももちろん、現代のリベラル・アーツと考えたときに、いろいろな要素があると思うんですよね。今、江村先生がおっしゃっていた1年生の全体ゼミで、いろいろな絵をみて、それを説明するといろいろな見方があるっていうところって、感じたことを言葉にしていくということではないですか。ここの部分というのは、以前の教養と同じ、何か共通する部分もあるんじゃないかと思うんですね。先生方を目の前にして、完全に…なんていうのでしょうか。

江村：「釈迦に説法」(笑)。

小坂：「釈迦に説法」(笑) なんですけど、教育学だとパウロ・フレイレがいていたように、課題提起教育とあと預金型教育といったものがあって、課題提起教育ってやはり重視されるのはコ

コミュニケーションですよ、言葉を交わし合う。あと、文章化するのであれば、文章化して人にも共有できるようなかたちにしていく。何かお互い学び合っていくといったところで、文化が育まれていくといったところがあると思うので、やっぱりそこは共通した要素というか、共有できるような知識としてコミュニケーションというものが基盤にあるし、そういった部分というのは以前から、いわゆる教養を大切にしていた時代から受け継がれ、そこは今のリベラル・アーツもとても重要なところだと思いますね。

片山：おそらく、池谷先生や江坂先生たちは、戦後の民主主義教育を受けて、人はみな対等・平等という考え方が強くあるんですね。民主的なものを共有している人々のコミュニケーションは、基本的に議論の形をとる。つまり、議論できるためには言語を適切に操れなければならない、議論を通して、お互いが問題をさらに深く共有していくっていう。ただ、今の時代は、もちろん言語化できることはすごく大切なだけけれども、同時に言語化できないものも認めていく必要があるんですね。言語化できるということを前提としたリベラル・アーツと、言語化できないことを前提としたリベラル・アーツは、何か根本的に異なるところがあると思うのですが、例えば、実際に何かを製作するということは、そのこと自体言語化しにくいところがあると思います。例えば、哲学者のカントが、芸術は教えることはできないというようなことを言っていますが、それに似たことがあると思います。もちろんマニュアルでこうすればこうなるということもあるにしても、むしろ実際に制作してみることで、言語化できないけれども、何か面白いといったこともあると思います。その何か残ったものを言語化することも必要なのだと思いますが、無理に言語化せずに、自分の中に残しておく、わからないまま誰かと共有するというのも大切だと思います。言語化できないまま、一人一人が自分の中に残しておく。うまくコミュニケーションできないことの重要性も、リベラル・アーツの中で伝えていくこともできるのではないかと思います。

小坂：何かそのダイレクトに、…何というのでしょうか、作品を共有していく、作品を鑑賞する方法を共有していくというような、そういった意味での言語化ということでは、結構難しい芸術作品というものは増えてきているし、あとそういう表現もそれはそれで一つのコミュニケーションの「しかた」として、言葉とは違う、作品を通してのコミュニケーションというものもあると思うんですね。さきほど、実は続けて申し上げたかったのは、何か作品を生み出すとき、言語化できない作品を生み出すときに、一見関係ないようなところでコミュニケーションをとっているというような、そういう方法で何かを伝え合うというようなことに関してです。要するに例えば、浦久俊彦さんの『リベラルアーツ』（集英社インターナショナル刊、2023年）のなかで紹介されていました、ポルトガルのピアニスト、マリア・ジョアン・ピリスによる若手音楽家のためのプロジェクトがあるのですが、そこでピアノ演奏の教育を若い人びとに行っていくときに、ピアノをそのまま教えるのではないんですね。共同生活をしていって、一緒にご飯をつくらたりそ

ういう生活をしていく中で、そこから言語化できない何かを伝え合っているというような、技術的なものかもしれないし、物の見方かもしれないですし、鑑賞のしかたかもしれないし…。

江村：感化するっていうか。

小坂：そうそう、そういった感じですね。そのレベルのコミュニケーションを進めていく中で、何か言語化できないものを伝え合うような。

原田：感化するとは？ どういう意味？ もう少し説明すると？

江村：古武術に関する本で読んだんですけど、バスケットボールのプロが来て、中学生か高校生と一緒にプレーする。とにかく一緒に。さっきの共同生活の話と同じです。プロがいるのは短い時間、ほんの一瞬だけど、一緒にプレーするだけ。例えば「ボールはこうするんだよ」なんていう指導はしない。ただ、その空間と一緒にいて、何かを感じ取るっていうか、言葉にならない何かを感じ取ったら、その後の練習でぐんと伸びちゃったっていうことがあったという話です。それが感化ってことですかね。小坂先生がおっしゃる話と同じですよ。よく職人は、背中で見せるとか、いわゆる古い言葉で言うと「盗め」みたいな感じで、その人の何だろう、空気っていうか、動きみたいなものを、真似たところで同じ動きにはならないんだけど、何かその人と一緒にいることで、なんとなくこんな感じっていうのを感じ取るっていうか。それに近いのかな。それがその言葉にならない部分、これはこういうものだからこういう理解をしてくださいっていうところの理解と、その、沁みてくるっていうか、そういう理解の仕方もあるんだっていうことなのかなと思います。

小坂：「教えない授業」とか、「教えない教育」などって最近よく言われるんですけど、美術鑑賞などでも、そういった著書も出ていますが、何かそういうような考え方と近いですよ。だから、フレイレが言っていた詰め込みの預金型教育のような、どちらかというとそのやり方を教えてしまうというようなものではなくて、何かコミュニケーションを通じて…それは、課題提起でこう議論してくというわけでもないんですけども、何かそういうやりとりをしていく中で伝わっていくもの、といったようなもの…。価値づけのしかたとか、意味づけのしかたとか、メタレベルでのそういったものの共有といったことが、いつの間にか出来上がっているという。こういう状況そのものが、こういうことを説明することそのものが言葉になかなかできないことではあるのですけれども（笑）。

原田：そういう部分がやっぱり今の社会の中で欠落していると思います。でも、多分、リベラル・アーツはこれだっていうのはなかなか言えないんですけど、バスケにしても、とりあえずあ

る程度共通の土台に乗っていないと、いけないってこともあると思うんです。やっぱり感化されたっていうのは、バスケットボールをやっているという、一定のレベルにあるから、ふいっと伸びていくっていう感じなのでしょう。だから共通の舞台に乗せるために必要なものがあるわけです。バスケのルールも知らないのにバスケをうまくなれといっても、感化されることはない。やっぱり、何か共通の基礎的なことがわかって、共通の言語が必要なんじゃないかな。それに、共通のものがあれば、自分が違うっていうことに気づくことができるわけだし、ここも大事なんじゃないかな。ただ、言語化するの大変なことですけど。これはちょっと難しい話になってきたけど、何なんだろうね。

小坂：それを許容できるってことがまず前提としてはすごく…。

原田：大事ですね。価値観を言語化すること。多分そこまでが我々の仕事ではないかと思っています。

小坂：許容ですね。

原田：それが、入り口を作ったりしていくってことなんじゃないかな。もちろん、それぞれみんな、価値観は違うし、趣味も違いますからね。でも、どんどんその価値を押しつけるわけじゃないけど、授業の中で展開していくと引っかかってる学生はいるし、もちろん反発する学生もいる。でも、最近寂しいのが、やっぱりその初めの舞台に誰も乗ってないなっていうことを痛感することがある。要するに、教壇の上から話をしていて、カッターの使い方が間違っていることに気づかず、目に見えないところで間違ったままどんどん進んでいってしまうことが起こっているわけです。どうやって今の学生に伝えるべきか、何か新しい方法が必要で、ちょっと工夫が要りますよね。

小坂：だから絶対そこに必要なものは、「遊び」の要素だと思います。

片山：遊びという言葉は、「遊びの哲学」という言葉があるように、哲学の対象にもなっています。1800年前後に活躍したドイツのシラーという文学者は、自身の美学論稿で、遊びが人間を人間にすると述べています。遊びとは、単なる弛緩でも単なる緊張でもなく、緊張を緩め、弛緩に緊張を与える自由な戯れのことを意味します。遊ぶ中で、人が人になっていくというのは、よくわかります。

小坂：やはり「文明」より先に「遊び」があるといったこと、ヨハン・ホイジンガなどにも関連しそうですが。

江村：遊ばす。

小坂：はい。

江村：そう。やっぱり保育園とか行って思うのは、本当に、子どもたちは、道具を身体で、物事を身体で理解しようとしてるなって感じます。言葉ではなくて、まず身体で感じとっていますね。そういう意味では、彼らの方がひょっとしたら土台が出来上がってるのかと思います。

原田：保育園とか幼稚園でしょ。でも、小学生になるとだんだん薄れてくるんだよね（笑）。

江村：やっぱりこう、言葉でいろんなものを分けすぎちゃって……。

原田：言語化して教えちゃうから。

江村：言語化して…で、やっぱり何か正解じゃないと駄目みたいなことになっていくから。

小坂：合理化していってしまう。

原田：本当にそうですね。保育園とか幼稚園では、自由に身体を使って、いろいろ遊びながら学んでいくのに、小中高ではそのあたりの要素がどんどん削ぎ落とされちゃう。大学生になった頃にはもう保育園、幼稚園で養われたものは無くなっているよね。あのままずっと来たらしい感じだと思うんだけどね。

片山：遊びと学びが多分一緒になってですね、幼稚園の頃は、それがだんだん分離しちゃうって…。

江村：そうです。保育園のときの子どもの言葉の方がすごく核心ついたことを言ってるなって思います。誰も教えてないのに自分で見つけているんですよ。それがだんだんいわゆる教科になり、それを勉強でテストの点を取るっていうそういう評価だけで、何かこう価値観がそれだけになっちゃうと…。

原田：ならないとね。

江村：ならないとね。社会に適應できないと……。

原田：このままだと駄目だよ。実際問題としてさ、小学生になって、保育園とか幼稚園みたい

にもっと遊びたいのにと感じたら、引きこもっちゃうよ。

江村：だからある意味、不登校と引きこもりって、ある意味正常な反応なのかなって思いますね。学校教育っていうのがおかしいという。

原田：本当にそう思いますよ。しかもさ、嫌だなあと思うんだけど、子どもたちはさ、中学校とか小学校の先生の裏側を見ちゃうよね。先生の話は聞き流して、まあまあ良い子の振りをしてさ、適当に付き合えばいいと考えていると思いますよ。上手く先生たちの間を擦り抜けていけばいいよって感じだね。

江村：最近の子どもたちは、そういうふうに思っていますよね。

原田：そうすると結局、そういうふうに出てきた子どもたちが私たちの前に座り、私たちをそういう目で見られるわけですからね。残念ですけどね。ちょっと話がそれちゃったけど…。言語化の話に戻りましょう。

片山：もう、そうですね。だから12年、小中高の12年間は多分、言語化するというか、その言葉も自分から出た言葉じゃなくて、与えられた言葉というか。その言葉に自分の感覚を、当てはめちゃうっていうんですかね。だから感覚自体も何かすごく狭まっちゃう。その言葉によって支配されちゃうっていう、そうやってきて。で、何というのですかね、身体的なもの、五感的なものがもうその言葉によって、すごく窮屈に…。

原田：そうですね。言葉が与えられるわけですよ。それで、その言葉が正しいかのように振舞っていくじゃない。さらに、今度は、数字ですよ。その証拠、論拠となるこのエビデンスを数字で語ってということになる。もうがんじがらめだよ。

小坂：そうですね、完璧な指標とか。まあ、統計。統計学とかね。

原田：何の意味があるかよくわかんないよ。とはいえ、私も、中国に行って、アンケート調査やったりして、数字で物事を考えようとしてたわけですよ。もちろん、全く否定するわけじゃないけどさ、傾向がわかる程度ですよ。少なくとも言い切ることはできない。あるときパウマン、ジームクント・パウマンという社会学者にはまってね。

小坂：LSEでしたっけ。

原田：そうそう、イギリス…。

小坂：イギリスのロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの。

原田：そうです。社会学者なんだけど、年配になってからやたら本書いてて、面白かったんですよ、彼がどこかで…。

小坂：『リキッド・ソサイエティ』。

原田：『リキッド・ソサイエティ』だったかな。いや、『近代とホロコースト』かな。そこでネカマ・テク (Nechama Tec) の調査を紹介しているんですよ。その調査というのが、ナチスからユダヤ人を助けた人間と、密告した人間に関する調査です。テクが下した結論はどこにも因果関係がなかったってということなんですよ。金持ちが助けたとか貧乏人が助けたとか、教養のある人が助けた、そういう因子は発見できなかったということです。この事実を拾ってバウマンは、社会科学の敗北だ、というようなことを言っています。まあ因子が見つけれなかったわけですから。もちろん、人間はそんな単純な存在ではないということなんでしょうけどね。ただ、アンケート結果に基づく自分の研究は、大したことないなと痛感して、そんな程度の話をもっと伝えることはできないと思い、アンケート調査はやめました。もっと言語化できないようなものに挑戦していくことに力を注ぐ研究にシフトすることにしたんですよ。だから、リベラル・アーツは、学問的にいうと、あくまでも個人的に言えばだけど、行き過ぎた数値・数字を美化している社会科学に対して、一定程度、批判的に捉えていくためには必要だし、言葉にできないことを悪戦苦闘しながらも探っている姿を学生に伝えるようにしています。

小坂：私も普通に実証研究を…。社会調査やって統計解析してというのは昔やっていました。

原田：面白くないよね。

小坂：面白さで言うと…。しかも今先生も因子っておっしゃいましたけど、多変量解析で因子分析なども、いくつの因子に分けるかといった、分析の方が恣意的に決めたりする部分があったりとかですね、クラスター分析などもそうですね。

原田：そうです。

小坂：なので、結構、客観的じゃない部分も分析の中に入っていてですね、ただ数字が分析結果に出てきますので、すごい客観的に見えますけど。

原田：とはいえ、論文数は増えるからね。

小坂：1回調査やると…。

原田：何本も書けますね。論文の数は結構大事だからね。ただ、学会とかで発表聞いていると、何が問題になるかっていうと計算方法が問題になったりとか。内容より利用するソフトが目ざれたりとか。ズレてます。

小坂：そうですね、分析方法とかそっちの方に質問が集中していったり。

原田：因子に関する質問はないです。そこを議論するとすごく面白いんだけどね。でも、実際は、分析方法ばかり聞かれる。そこしか興味がないって感じです。

小坂：発表者も、何かこの分析手法を使いたいからやりましたというような、本末転倒じゃないかということもあり得るんですよね。

原田：そういうのがすごく多いよ。だからやっぱり言葉にできないようなものを、何か考えていくってことが大事だと思う。それに、学生も、そっちの方が面白いと思うでしょう。言葉にできないようなものがあるって、いや実はわからないんだけどとか言いながら、授業を進めていく方が面白いと思う。うまく表現できないことの方が多んだけど、教員もできないんだって感じですね。それが大学だと思うんだけど。多分、小中高で、自分の言葉で表現してこなかったんで、自分で何かこう言って言葉にしてみたらって言ったら多分できないんですよ、どうしていいかわかんなくなってしまう。言葉にできないことはできないと、共有できることは、あるんじゃないかなと思うよ。

小坂：その話をお聞きしていると、チャールズ・ライト・ミルズという社会学者が、「動機の語彙論」ということを言っていてですね。要するに何か行為をしたときに、その動機っていうのが実は一般的に「準備」されていて、で、何でそれをしたのかというのは、その動機の部分は後付けで準備されている。社会の側が準備しているその動機の語彙を用いて、説明しているだけだと。最初にそういう合意があって、それを、そうした語彙を増やしていった、どれを持ってくるのかといったような、その技術になってしまっていて、自分にあるモヤモヤとした何かこの、言語化しにくい部分を素直に表現する、というのではなくて、動機の語彙から選んできて説明している、といったような、そういう議論があるんですよね。ここの辺の話になってくると、もうミシェル・フーコーの話などにも繋がってきちゃうのですけれども、そういう、うまくそういった準備されている動機の語彙のようなものを用いることができる技術、といったものを我々は教え

てしまっていて、本当にクリエイティブな何かっていうものを表現していくというような部分を、合理的にそこも誰でもわかるように、わかりやすいように説明していくような。そういう言葉や行為を説明できるようにして、それがうまくできたら「うまくできたね」とか、「君はなかなか頭がいいね」とか言ってしまったりなどですね。そういうことをしてしまっているのかな、という気がしないでもないですね。

原田：確かに、本当にその通りです。ただ、先生方も理解していただけると思うけど、教員をしていて、何が楽しいかっていうと、学生のなかに、すごい才能が見つかるときじゃない？

江村：才能かどうかわからないんですけど、今の話で言うと、ゼミの希望者を面談するときに、面白い男の子がいました。ゼミ生を選ぶとき、勉強ができるとか、意欲があるとか、もちろんそういうことも考慮するけど、話して面白かったら入れようと思っています。今でも時々あるんですけど、僕のゼミに入ったら何したいって言ったら、漠然となんですけど、俺っていうシンボルを作りたいと言う学生がいたんです。なんじゃこりゃと思ったけど、なんか面白いなと思って、別に何を作りたいとかどんな素材でとかじゃなくて、なんかそんなことしたいっていう感じでしたが、ゼミ生になりました。彼は、結局、それこそ片山先生の授業を受けたのかな、わらを燃やして、消火させることで、自分の思いを消火するってどういうことかみたいなことを表現したんです。ただ、それを10月にやって、全て燃えつきちゃって。その後、本読み始めて、論文で卒業しましたけど。

原田：そういう天才というか、才能豊かな人間に会えるのって、面白いですよ。だから最近思ってるけど、もう自分の何かを教えようなんて思わなくて、もうこれが正しいんだとかじゃなくて、何か自分の好きなこと言って、それに引っかかってくる学生が伸びていけばいいかなと。ちょっと後押ししてあげるとか、そういうのが大学の面白みだと思います。ちょっと俗っぽい話になるけど、対面じゃないとできないし、オンデマンドでは、面白い人間に出会う確率は減りますからね。才能に出会えないと、人生寂しくなります。たとえば、黒板に書いている最中に、頭に本来説明しようと思っていたことと違うことが浮かんでくることがあります。「ちょっと待って今すごくいいアイデアが浮かんだ」ってか言って、ノートに書いたりしてます。逆に、リアクションペーパーの中に鋭いことが書いてあったりして、すごい反省するときもあるし、論文書き直さなきゃとか思ったりします。こうした出会いも、たぶん、リベラル・アーツの入口みたいなものかもしれない。

小坂：いや、その感覚すごく最近よくわかってですね、私も結構思いついたことを即興で…実はさきほどの授業でもそんな感じでやっていたのですが、映画社会学（「社会学特講」）なんですけども。おっしゃるように、一方的に何か伝えるというよりは、反応を見てそこからひらめいた

ことですか。あと前回、ショート・フィルムを見せていて、その感想文、というよりも、あらすじを自分なりに書いてきてもらおう。その作品は、音は音楽しか流れず、セリフのないアニメーションなんです。大体8分ぐらいかな。短い作品です。で、そのあらすじを自分なりにまとめてきてもらって、それでどこに注目してるのか、個性が出るんですが、まさに江村先生の手法を真似させていただいて。その後、自分なりの批評を書いてみよう。自分なりにどう解釈したかという。そうしたら1人、A6のコメントペーパーあるじゃないですか。それを1枚ずつ配っていたんですけども、これじゃ書ききれないっていう、ここからさらにA4の紙1枚の、何かのプリントの裏を全部、罫線も何もないんですが、そこにバーってすごく細かく書いてあってですね。それを読みましたら、またすごい分析がしてあったので、…今このこのシーンはこの主人公のこういう意識が背景にあってとか、この部分ではこの主人公が実は死んでいるのではないかとかですね。なにかとでも、深読みといえば深読みなんですけれども、そこまで深く考える。考えて、こうなんじゃないか、あなんじゃないかと試行錯誤しているといったような、そのまんま出てきて…これすごいと思ひまして(笑)。今回ちょっと、みんな一人一人、結構それを一所懸命書いてきてくれていたので、…そのコメントカードをほぼみんなびっしり書いてきてくれたので、それらを全て私が読み上げました。他の学生がどのような解釈をして、どういう見方してるのかということが、お互い伝わってほしいなと思って、そういうことをあえて即興でやりました。そうしたらやはり最後の、その長い分析がすごすぎて、みんなにとっても刺激になったな、というのが見ていてひしひしと伝わってですね。ということも即興でやってみると…、学生が授業を成り立たせてくれているという感覚は、そういうやり方をすると私の中にもあって。

原田：もうシラバス通りじゃないってことだよな(笑)。

小坂：全く無視ですね(笑)。

原田：全く無視だよな(笑)。でもそういう授業やっていると、学生は文句言わないよね。

小坂：言わないのではないのでしょうか。最初に言っちゃうんですよ、これ(シラバス)前後入れ替えたり、順番が違ったりするかもしれないよ、という程度のことも。

原田：まあシラバス通りにやらないよっていつも言っちゃうんだけど(笑)。

小坂：私もその一言は結局付け加えています(笑)。

原田：とはいえ、話を少し戻すと、リベラル・アーツの入口というわけではないけど、なんか

んやいって分析ではなく、解釈が大事ですね。結局、自分が世の中の何か物を見て、どう解釈しているかということでしょう。

小坂：帰納でも演繹でもなくて解釈、意味を解釈する。

原田：そうですね。

小坂：意味をつくといいですか。

原田：そうそう。意味をつくることによって、みんな絶対違うと思うんだけどその共通項を見つけていく。最終的には、自分を解釈できるような方向へ、要するに他人とも違うんだっていう。ちょっと具体的な授業に落とし込むと、1年生の初めにみんな解釈が違うんだっていうことを、いろんな映像見たり、何か物を作ったり、何か文章を読んだり、解釈が違うことを分からせることが重要でしょうね。共通的な答えを決して押し付けるようなことはしないでね。そういう土俵に上げなきゃいけないんでしょうね。ただ、解釈を始めると止まらなくなるんだけどね。

片山：それは、哲学ですね。

原田：確かにね。ただ、解釈について考えることは、多分、小中高のいろんな呪縛から解放するための一つの手段かもしれない。

江村：それは大事だと思います。やっぱり評価からの解放でもあります。自分がどう評価されるかっていうことから解放しないと、大学の授業もそんな感じなんでしょっていう構えがあります。それを解き放つには、共通のものを見てても違ってても大丈夫っていう、なんかそういう経験がないと、その映画の解釈にしてもそうやってみんのって言っても、別に先生もすごい面白いねって言ってくれたら、それもありませんっていうと…。

原田：逆ですからね。小中高だと逆ですからね。同じ解釈しなきゃいけないだもんね。

江村：本来、図工や美術がそういう科目であるべきなのに、それがあまり機能しないんですよ。だから、よくあの美術館に行くと絵を鑑賞する前に、解説をまず読んじゃうんですよ。あれはいけない、良くない。

片山：良くないですね。

江村：もちろん、見た後にこう感じて、それがあると、「あっそういうこと」って、それはすごく参考になるんですけど、みんなその解釈を読んでから、「はあ、こういう絵か」となると、何かそういう見方をしなきゃいけないってことになる。あと、最近だと美術館では音声ガイドが定着しています。声優や俳優がガイドの声を担当していたりして、そうなると、この絵はこういうものですよっていうわけで、もうつまらない。

原田：もう耐えられないよね。この絵を見たらこういうふうを感じなきゃいけない。この話を聞いたらかようなふうを感じなきゃいけないっていうのにも縛られてるからね。ただ、本学には、耐えることがあまり得意じゃない学生が少なからずいるのではないかと感じています。小中高の教育に順応できなかった人間がたくさん来てるんじゃないかと思う。偏った天才って言うんだけど、小坂先生が紹介してくれたものすごい解釈書いた学生は頭いいんだよ。でも順応できていた可能性は低いと思う。順応しなければいけないとか、逆に順応できなかったからダメな人間だという呪縛、愛知県は、とくにそうだけど、いわゆる管理教育の呪縛から解き放たないといけないと思う。

小坂：あとやっぱり、先生がおっしゃったように、思いつきでこうやるって、その…考えて思いついて、今まさに黒板に書く内容ってクリエイティブな作業をやっているじゃないですか。そういう姿を、わざわざ、わざわざといいますか、もうそのまんま自然に見せるっていうことが、さきほどの言語化できない一緒に共同生活みたいなことと、結構共通しているのではないかというふうに思います。そこを見せた上で、一緒に巻き込んで何か一緒にやってく、というような。何か、教員と学生みたいな、その垣根のようなものを取り外してしまっ。

原田：そう。ゼミじゃなくて、授業でやりたいですね。

小坂：授業で。なにかそういう感じでやってく中で、新しいものって生まれてくるというか、直感が、そういうときってひらめきが出てくるのではないかなという気もするので。

原田：そういう授業じゃないと詰まらないですよ。

小坂：我々もやっていて面白くないというか。

原田：そう。こっちが面白いから多分彼らも面白いはずだっていうか。これはちょっと強引かもしれなけど。

小坂：いや、でもそうだと思うんですよ。面白がってないと、絶対面白くないと思います。

江村：造形の授業ってやっぱり、まずやってみせるんですよ、もうやりなさいじゃなくて、まず今日はこれとこれとこれをやるからねって言ってやったときに、当然僕も間違えちゃったりするんですよ。そうすると、学生たちは、あ、間違えたって。ちょっとみっけ、みたいな。それをみつけてやるのがかえって面白いのかなと思って、あ、先生も間違えるんだって、それは間違えるよって、なんかそこからまたさらにぐっとハードルが下がるといった。

原田：なるほどね。

江村：ただ、学生もやっぱり、わかってはいるけど実際にそうやって、やってみせたり、失敗とか見せると、ああ、それでも大丈夫かってなるんです。ただ、本当に失敗を嫌がるんですよ。

原田：どういうこと？

江村：例えば、紙を切っていて、ここを切ってってやったときに、「先生これでいいですか」って、「もうちょっとここをこうすればよかったね」っていったら、「先に言ってよ」って。失敗したくないのでそう言い返すんですよ。僕は「失敗してもいいじゃない。学生は代わりの紙あるし」って思いますけどね。ただ、保育園や幼稚園までは多分何枚も紙は使えたはずなんです。

原田：「紙頂戴」って言いながら、みんな先生の所に集まってきますよね。

江村：それが図工の時間になると・・・もっと自由だったはずなのに。

原田：そういえば、図工の時間で、本棚とか同じものを作る授業はキツかったね。同じ材料が与えられて、でも造るとものすごい差が出る。下手くそだから、恥ずかしくてね。だから愛着がわかないからすぐにゴミ箱に捨てました。好きな本棚作ればいいと思うんだけどね。

片山：大学にそういう子たちが入ってくるわけですから、そういう意味でリベラル・アーツは必要わけですよ。

原田：要する言語化できないとか答えがないような世界に、彼らを入れなきゃいけないんだけど、彼らはずっと答えのある世界に生きてきてるから。まず答えがないとか答えは違うんだっていろいろあるんだっていうことを教える授業がないと、多分うまくいかないんじゃないかなあと思うね。そのときに芸術は、すごくわかりやすいんだろうね。

片山：やっぱりリベラル・アーツも、アーツですからね。自由な技巧である芸術ってやっぱり一

番重要なものじゃないかなって思いますけれどもね。

原田：小説書けるとか、詩でもいいんだけど、そういうのもね、鍛えて欲しいよね。文章書くことは、自分の何か思ってることを書かないと、駄目ですよ。自分の、まとめる力とかそれはそれでいいけど、まとめる力だけだったらもう、AI だけ…。

江村：確かにもう本当にそうなっちゃいます。

小坂：ChatGPT とか…。

片山：ドイツ語で教養のことを Bildung (ビルドゥンク) というのです。Bild (ビルト) というのは、絵とか造形のことなんです。だから要は、教養とは、形を作る (あるいは作られる) ということなんです。その意味で言うと芸術とはまさにピッタリですね。高校までのように鋳型に嵌められるのではなく、鋳型を作る。そして作るためには、何らかに基礎が必要となる、もう一方で、鋳型はうまく作り直さなければならない。こうした作業は、できるだけ早くから行っていたほうがいい。そうやって作っては壊す、壊しては作る。大学の初年次教育には必要なことだと思う。

原田：やっぱり入ってきたときに強烈な授業をやらないといけないと思う。違っていいんだっていう授業が必要ですね。

江村：どうしても福祉大学の成り立ちからそうですけど、やっぱり、職業っていうのが先にあるじゃないですか。こういう仕事に就くための勉強があるんだけど、その前に、なんか、高校までとは違って、ここでは何言ってもいいっていう授業が必要ですね。その上での社会福祉だとか、教育とか経済とかだよって、あった方が、いいだろうなって思いますね。そのためには、音楽であったり文学であったり、そういう授業が必要ですね。

小坂：文学の先生がほしいですよ。そういう意味では、足りないですよ。

江村：そうですね。小坂先生も映像の世界で。

原田：本当そうですね。ただ、私たち教員の趣味を全開にすることから始めるのも一つの方法だと思います。この間も、片山先生の授業で桑田佳祐とユーミンについて話して、でもみんなわかんないだろうなとか思いながらやったけど意外とわかってたんだよね。まあ親世代がユーミンとかサザンは聞いているのかもしれないんだけど、意外と理解度高かったですね。

小坂：今80年代のシティ・ポップ….

原田：昭和歌謡ですよ。だから、趣味を最大限に生かして授業の中にどれだけ組み込んでいくかっていうのが….

小坂：もっと言えば、我々がその趣味だっていうふうな枠組みを、とっばらわないといけないんじゃないでしょうかね…。もうそれは趣味じゃなくて。

江村：研究領域ですね。

原田：もちろんそうですけどね（笑）。でも、自分の趣味で15回の授業はできないよ（笑）。経済学部では、以前、地球人間学という授業があって、先生たちが、自分の好きな国とか、留学していた国を紹介して、講義の課題は、学生に興味のある国とか都市を選んでもらって、パンフレットを作るという内容なんです。本屋で売っているガイドブックよりも面白いものが提出されることもあって、今でも、研究室に20冊くらいは保管してあります。いつか使うつもりです。ですから、文学とか文学の歴史とかさ、先生が、好きな小説とか、作家を選んで講義をやるのもありだと思います。すごいアクションペーパーに出会えそうだしね。

小坂：オムニバスでやると。

原田：そうそう。好きな映画監督を何人かで紹介するものやりたいですね。楽しそうに話す先生の姿を見せることができるし、まさにオタクの世界全開になるけどね。

江村：でも何かそういう、先生の熱量っていうか。あれ、この先生授業のときは熱いわ、っていうのを見せるのっていいと思う。

原田：熱さはだいじですよ。専門分野とは違う顔を見せることもね。ただ、15回は無理だけど。

片山：そういう趣味と専門って無関係ではないですからね。例えば江村先生はバウハウス（20世紀前半のドイツの芸術運動）に関心を持たれているとお聞きしました、何か少しお話いただけますか。

江村：本当の趣味というとガンブラとかなんですけれど。結局バウハウスに自分が興味が湧いたのは自分がいた大学の中の、僕が1期生のときにできたいわゆるゼロ免課程の総合造形コースっ

ていうのがあって、出てから、大学院ぐらいのときに、バウハウスって、たまたま授業でやったときに、これってうちのコースじゃないのって思って。結局、入ったけど、できたてホヤホヤだから、何の設備もなく、最初は基礎みたいな感じで、デザインやったりデッサンやったり、日本美術、西洋美術の座学授業やって、3年生でやっと素材を触って、二つ選んだうちの一つを最終的には選択するという課程でした。それが年を追うごとに変わって1年次で全種類を触り、2年で二つぐらい選んで、3年から1本にしてっていうふうにだんだん成熟していったんですけど、結局それがバウハウスの基礎過程みたいなこととすごく似てるなと思って、だから何かその辺がすごく興味があって、あの人たちも一応考えてたのか、あの当時の先生たちも。だから今自分がこういう教育をする立場になったときに、最初はざっくりしてたけど、今自分がこう、いろんなことが話せるのも、ああいう段階を踏んだから、いわゆるベースになるそれこそリベラル・アーツを含めてそういう勉強して素材ってどういうものかっていうのを学んだ上で専門的な素材をちょっとつまみつつ、最後、専門、自分は陶芸っていうふうを選んでいったっていうのは、割とバウハウス、(あ、バウハウス自体は短い期間だったけど、)それが影響をいろいろ与えたっていうのは、ここの、あの、愛知県の小さい教育大のところにもそういうことをやってみようっていう先生が現れて、それを教えたってことかなと思ったら、面白いなと思ってます。

小坂：でもバウハウスがやっていたこと、考えてみるとリベラル・アーツ…。

江村：実は今日その話が出るのかなと思って、大昔にあった図録など持ってきました。これで見るとやっぱり、古びてない部分が結構多いし。小坂先生は本当にいろいろご存知だけど、やっぱりクレイとかカンディンスキーとかもうそうですね、今でもっていう人が、この教員でいたっていうのがすごいなと思って。

小坂：イッテンとか。

江村：イッテンとかね。ここのあの丸い今の図のところ丸い…これが外が基礎で。だんだん濃くなってくるっていうね。僕も2年生の時に授業で、木で椅子作ったりしたんですよ。自分でちゃんと図面からひいてね。あと、金属を使った制作もしました。アルミと銅の板でそれぞれ叩いてスプーンをつくるという課題でした。そうするとスプーンって作るとわかるんですけど、あれは器に棒がついてるんですよ。だから、必ずここ(スプーンの丸い部分)は水平じゃないと駄目なんですよ。もれちゃうから。でもわからないから適当に叩いて、なんとなくかっこいいからこれでいいんじゃないって好きな形にするとここから漏れるんですよ。作ってみてはじめて、こういう状態にしないとスプーンって成立しないのかってわかるので…。

小坂：それでカレースプーンとか、ああいう固形のをすくうのは、あれでスプーンすくっちゃ

うと横からじゃばって、ちなみに映像だとモホイ＝ナギも…。

江村：そうそう、モホイ＝ナギも。そうです。ちょうど2年ぐらい前、神戸でバウハウス展みたいなのやってたときがあって、やっぱり今でも何か通じる。全然その、古くないっていうのがあって。すごいよね。

片山：面白いですね。

原田：ちょっとまとめると、リベラル・アーツの目的として、管理教育からの呪縛を解くことをしっかり掲げたいですね。ただね、リベラル・アーツのことばかり話していると、あいつら楽しんでるだけじゃないかって言われちゃうから、そうじゃなくて、愛知生まれだから、本当に管理教育を受けてきた人間としてよくわかるしね。学生たちの気持ちが、この呪縛を解かないと始まらないよね。

江村：ええ。

小坂：ちなみに私は千葉なので…（笑）。

江村：西の愛知，東の千葉ですね。

原田：この呪縛を解くっていうのが、いや、それはね団塊の世代には絶対わからないこの私たちの苦しみがあるんだよ。あの人たちが絶対理解できないですからね。

江村：あの人たちが僕らを教育してた…（笑）。

原田：本当だよ。あの世代は、言ってることとやってることが違うんだよ。言ってることは解放だとかいうけどさ、後世代に対してさ、もう徹底した管理を押しつけてくるからね。

江村：楽ですからね。

原田：そう、そうなんだよ。もしかすると我々の役目っていうのは、大学における役目っていうのは、脱管理教育ですよ。ちゃんとカリキュラムに組み込みたい。これこそが、今やらなきゃいけないことだと思うよ。そのためには、まずは、みんなが持っている趣味の授業をリレー講義でやっていく、どんどんとね。面白い授業を、学部、全学的に組み立てていけたらいいと思っています。だから今、海外研修とかあるじゃない。毎年、違う先生が好きなところに学生を連れていく

という研修にしたいんだよね。

小坂：西海岸ばかり行きそうですね (笑)。

原田：確かにね。小坂先生のツアーにいけば、別の世界に出会えますしね。そこが大事ですよ。既存の常識とかね、こうであるべきだという考えを壊さないよね。そこは、私たちに求められる腕だよな。

小坂：やってみせるとか、一緒にやるとか、そこがまずは必要なのかなという気がしますね。それでもいいんだよ、みたいな。

江村：何の本だったか忘れてましたが、芸術の授業っていう本を読み始めた時に、ある先生が、普通の先生ってか、ダメな先生はとにかくよく喋る。で、いい先生はやってみせる。本当にすごい先生は、学生の心に火をつけるみたいな。そういう段階があるよって言っていて、ああ喋りすぎるのはやめようと思って (笑)。言いたくなるじゃん (笑)。……先生、削れませんか (笑)。こうやってこうやってこうやってやっているから、よくこの状態でそこまで削ったという。削ったんだ (笑)。削ったことにしたんだけど、でも芯は出てきてなくて、まだ。

小坂：違う意味での作品かもしれない (笑)。

江村：あえて僕を試したのかな (笑)。でも本当、そこをどういうふうにするかはちょっと知恵がいるよね。ちょっと悩んでる。そういうものこそカリキュラムの中に組み込まないと。

小坂：我々が何かプライドを捨てないとだめですね。こう、上手にやってみせないといけないみたいな勢いは全部とっばらってしまっ。

原田：そりゃそうだよな。

小坂：私もゼミで、自分の下手な編集をした……スマホで編集した映像を、これはこうやってフッテージをこれだけ5つ用意して、ただ単にこう繋げただけなんだけど、繋げてバック・ミュージックをつけてキャプションもちょこちょこつけると、ほらもう作品っぽく見えるでしょみたいな、全然大したことない映像なのですけれども (笑)。恥を忍んで見せたりして、…わざとやらないとだめだなんていうふうに思っていますね。

原田：確かに、そうだね。

小坂：これ正しいのかとか、何かちゃんと解釈になっているのかとか、そういうことも我々ももう、あまり考えずに楽しんでいる姿をそのまま、ダイレクトに見せるという。

原田：乗って来させないといね。

小坂：そうですね。

原田：そういう意味では、教員が教員であることを、ちょっと外れてないと。でも、あんまり自分が教員だから教えなきゃいけないという思いはないんだけどね。

小坂：まあ、ですのでこの集まりにいらっしゃるという（笑）。

原田：おっしゃる通りですよ。今日、みなさんと話していて、痛感したのは、管理教育に対するアンチ、これを潰そうっていうのが、もしかしたら私たちがやらなきゃいけないってことだね。その方法はいろいろあるんだけど、一人じゃ限界あるからね。みんなで一つ協力してやって、うちに来ると面白いことやってるぞ、みたいなことが噂になっていくような流れを作りたいですね。

小坂：他の福祉大も、何か様々な取り組みで特色っていいですか、有名になっているところもあるじゃないですか。日本福祉大学はリベラル・アーツでもっていう。

片山：今回はこの辺で締めておきましょう。リベラル・アーツについては、まだまだ語ることがありそうですね。もう少し、江村先生からバウハウスについても聞きたいです。また、本学独自のリベラル・アーツ実践についても語りたいですね。また、次回よろしくお願いします。